

## 病虫害の発生概況

### 〔病害の発生概況〕

#### 1. 稲・麦

前年が多降雨、日照不足で穂いもちが多発生したため保菌率がが高く、各県とも種子消毒の完全実施、箱施薬等の予防防除が励行された。しかしながら育苗期の連続的な降雨で多湿状態になったため、苗いもちの発生が多く、早植え、普通期水稲の本田における発生時期は平年より早かった。

佐賀県の早植水稲では6月17日の調査で発生圃場率41.7%、発生株率12.4%であった。6月下旬～7月上旬にかけて沖縄県を除いた7県で注意報を発表した。7月1日には平年より17日も早く梅雨明けになったが、病勢進展は停滞せず、生育初～中期は多発生になり平年とは異なった発生様相を示した。初期感染源量が多かったこと、若齢で高温により養分吸収が促進されたこと、圃場抵抗性弱品種の栽培面積が増加したこと、気温の日較差が大きく、露の形成が多かったこと等が多発生原因になったと考えられる。しかし、梅雨明け以降の記録的な高温、多照、少雨と葉齢の増加で後半の葉いもち進展は抑制され、穂いもちは並～少発生に終わった。

紋枯病の発生時期は早く、長崎県では7月11日に注意報を発表した。高温で茎数も多かったため多発生が心配されたが少雨により低湿度で推移し、上位進展は緩慢で並発生であった。もみ枯細菌病は宮崎県の県北部山間地でやや多発生した以外は並～少発生であった。前年多発生した白葉枯病は一部常発地だけの少発生に終わった。佐賀県ではレイホウ、ヒヨクモチに墨黒穂病が多発生した。

黄化萎縮病が鹿児島県の早期水稲に多発生し、甚、多面積は50ha、発生面積は280haに及んだ(平年発生面積0ha)。発生時期は5月上旬で、前年の多降雨により周辺のイネ科雑草での越冬菌量が多かったこと、4月の冠水が多発生の原因と考えられる。メタキシル粒剤の散布によって被害を軽減することができた。

麦類では大分県の一部圃場でコムギ赤さび病が多発生したが、赤かび病、うどんこ病とも並～やや少発生で、オオムギ縮葉枯病の発生も少なかった。

#### 2. 野菜・畑作物

7月上旬以降の記録的な高温、多照、少雨により全般的にみるとこの時期に栽培された野菜では病害の発生量は平年並～少であった。

いちごうどんこ病が前年に引き続いて各県でやや多～多発生した。長崎、宮崎、鹿児島県では注意報が発表された。罹病品種の増加、早取り技術(夜冷、株冷)の普

及、苗床からの病菌持込み、薬剤散布の不徹底等が多発生要因として挙げられる。炭そ病は長崎県でやや多発生し、*Colletotrichum acutatum*による炭そ病は発生地が拡大した。

ピーマンうどんこ病が宮崎県の冬春ピーマンでやや多、鹿児島県で多発生した。2～3月の発生量が多く、宮崎県では2月28日に注意報を発表した。2～3月の晴天、乾燥が多発生原因になった。

キュウリでは褐斑病が大分、宮崎県の冬春キュウリでやや多発生した。宮崎県の抑制栽培では生育初期より発生の多い地区があり、11月中旬には約60%の圃場で発生が認められた。ブルームレス台木の普及、不適正な肥培管理、温湿度管理の不徹底が発病を助長したと考えられる。福岡県の冬春キュウリで灰色かび病がやや多、夏秋キュウリでうどんこ病が多発生した。

タマネギでは白斑葉枯病(ボトリチス葉枯病)が佐賀県で多発生した。育苗床からの発生が認められ、罹病苗が定植され、11月～12月上旬の曇雨天により本圃初期の発生が多くなった。しかし、1月上旬からの好天と適切な薬剤散布が実施されたため、2月下旬からの発生は少なかった。

その他野菜病害では冬春ナスにすすかび病が福岡、佐賀、鹿児島県で多、灰色かび病が佐賀県でやや多、秋冬ハクサイに軟腐病が大分県で多、長崎県でやや多、冬ニンジンにうどんこ病が長崎県でやや多、冬春トマトに灰色かび病、葉かび病が熊本、宮崎県でやや多、スイカ疫病が大分県でやや多発生し、沖縄県では夏秋キュウリに褐斑病がやや多、ニガウリにウイルス病がやや多、トマトとピーマンにモザイク病がやや多発生した。

ジャガイモでは鹿児島県の春作に風傷みで疫病が多発生した以外、特に発生が目だった病害ではなかった。ダイズ病害はいずれも発生が少なかった。

#### 3. 果樹

稲、麦、野菜病害と同様に、梅雨明け以降が高温、少雨で経過したために平年並～少発生の病害が多かった。

ナシでは黒星病が熊本県で生育期前半に多発生した。前年の多発生により越冬伝染源量が多く、発芽期以降比較的気温が低く推移したため5月中旬以降多発生し、6月29日注意報を発表したが、その後の高温、少雨で後半の発生量は少なかった。大分県でも同様な発生推移であった。並～やや少発生となった佐賀、福岡県でも初期の発病は多かった。輪紋病が佐賀県の一部地域で多発生した。

カンキツではかいよう病が佐賀、熊本県ではやや少発生であったのに対し、宮崎県ではやや多、鹿児島県では多発生し、鹿児島県では6月23日に注意報を発表した。前年の台風により越冬病斑量が多く、4～5月に気温が

高めに推移し、降雨により春葉での発病が目だった。また、果実では6月以降の降雨と台風により発生が増加した。佐賀県では甘夏やポンカンに発生が多かった。日焼け炭そ病は福岡県では少雨が続いたため果実の肥大が進まず、少発生であったが、熊本、宮崎県では極早、早生温州を中心に日焼け果が目だちやや多発生になった。黒点病が沖縄県で5月の多雨によってやや多発生した。

#### 4. 茶樹・特用作物

茶樹では炭そ病が宮崎県で並～やや多発生であった。

前年秋季以降発生が増加し、越冬病斑量が多く、4月下旬に降雨が続いたため1、2番茶とも高い発病程度で推移した。このため4月26日に注意報が発表された。3番茶以降は並～やや少の発生になった。その他病害の発生は各県とも少なかった。

サトウキビでは鹿児島県で葉焼病が並み、沖縄県で黒穂病が並みであった他はいずれも少～やや少の発生で終わった。

(九州農業試験場地域基盤研究部)

1994年稲主要病害虫の発生面積

(単位: ha)

病害虫名	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	
<b>(病 害)</b>									
葉いもち	27,036	16,747	10,000	25,000	20,490	17,329	19,236	173	
穂いもち	36,644	7,995	3,000	12,000	11,160	9,817	10,764	25	
紋枯病	44,840	22,967	10,000	15,000	28,700	13,238	23,337	214	
白葉枯病	693	10	10	500	555	538	1	1	
もみ枯細菌病	10,920	1,337	960	500	5,750	2,938	4,792	—	
縞葉枯病	700	100	160	500	1,745	0	0	0	
萎縮病	1,400	200	600	1,000	2,650	338	840	—	
黄萎病	0	0	10	0	—	0	501	—	
ごま葉枯病	5,410	5,168	3,000	400	6,130	1,714	1,912	235	
ばか苗病	1,400	600	290	300	1,650	245	1,566	3	
小粒菌核病	—	1	800	100	1,000	0	0	—	
心枯線虫病	—	0	30	100	11,100	0	2,192	15	
内穎褐変病							18,997		
<b>(虫 害)</b>									
セジロウンカ	31,520	10,194	13,000	13,000	13,100	16,166	7,229	331	
トビロウンカ	9,800	4,409	5,000	9,200	5,700	4,240	3,941	9	
ヒメトビウンカ	33,880	9,174	6,000	3,300	3,300	21,951	2,549	4	
ツマグロヨコバイ	39,240	11,465	6,000	10,300	15,600	22,934	8,725	730	
コブノメイガ	43,760	32,789	20,000	36,200	14,935	14,028	25,145	330	
イネツトムシ	36,700	25,000	2,000	—	14,800	0	12,446	4	
イネヨトウ	1,410	300	1,000	100	900	734	1,160	—	
フタオビコヤガ	170	0	150	50	1,850	0	872	4	
アワヨトウ	700	700	10	100	400	0	171	—	
ニカメイチュウ第1世代	50	0	0	—	350	0	0	0	
ニカメイチュウ第2世代	280	4,400	0	—	108	0	0	0	
イネミズゾウムシ	14,630	8,000	6,200	5,500	17,570	22,233	9,559	585	
イネゾウムシ	2,100	1,500	2,000	100	7,200	2,708	6,978	3	
斑点米カメムシ類	5,070	8,000	10,000	2,500	5,250	8,167	6,136	129	
イネクロカメムシ	900	5	50	50	720	245	218	87	
スクミリンゴガイ	18,140	8,885	1,796	4,500	3,110	3,020	2,782	81	
総作付面積	268,580	55,900	39,400	19,900	58,000	33,869	27,500	33,040	973

注) 宮崎・鹿児島は早期・普通期の、沖縄は一・二期作の合計を示す。

## 〔害虫の発生概況〕

### 1. 稲・麦

水稲：イネウンカ類は、発生飛来源である中国南部の早稲上で、平年よりもやや多発していた。一方、梅雨前線は不活発で、6月中は日本の南岸から南海上に停滞し、7月初めには朝鮮半島へ北上し、九州は約2週間早く梅雨が明けた。このためウンカを中国から九州へ搬送する下層ジェットの発達は弱く、前線がやや北上した6月3半旬に南九州を中心に、また前線を伴った低気圧が日本海を東進した6月5～6半旬に、九州全域に小規模な飛来侵入が認められたのみであった。沖縄県を含む九州全県でトビロウンカとセジロウンカは少～やや少発生で、両種の発生面積率はそれぞれ約16%と40%で、平年値を大きく下回った。一方、コブノメイガは6月中下旬にやや多飛来し、早期及び早植え水稲で一代増殖した後、普通期水稲へ侵入したため、九州南部では分けつ初期から顕著な食害が現れた。長崎、宮崎、鹿児島県で相次いで注意報が発令された。また一部地域の晩稲では、登熟期に第3世代幼虫によると思われる被害葉が高率に見られ、福岡、熊本、及び鹿児島県では発生程度甚の水田が少なからずあったが、おおむね平年並～やや多発生で、収量への影響は顕在しなかった。

ツマグロヨコバイは平年並～少発生で、発生面積率は昨年をやや下回り42.8%であった。ヒメトビウンカも全般的には平年並～少発生であったが、福岡県と鹿児島県の普通期水稲で8月以降やや多発生した。しかし、被害は問題にならなかった。イネミズゾウムシについては、中山間の早植地帯で発生地域の拡大と発生密度の上昇が指摘されているが、九州全域における発生面積率は31.4%で、1989年以来横ばい状態を続けている。しかし、大分県と鹿児島県では、早期水稲を中心に本種の発生面積が平年の約2倍に拡大し、発生程度甚を含む水田も認められる多発生となった。ただし、収量への影響は顕在しなかった。

斑点米カメムシ類は、夏季の高温少雨のため福岡、佐賀、長崎、宮崎各県の山間山麓、牧草地、雑草地等での発生が多く、早期、早植水稲でやや多発生した。このため、宮崎県では早期水稲、長崎県では普通期水稲を対象に本種に対する注意報を発令した。他県では平年並～やや少発生で、九州全域における発生面積率は16.8%で、昨年の15.2%をや上回った。

昨年度長雨で発生拡大したスクミリンゴガイは、暖冬のため越冬個体数が増加し、佐賀県と鹿児島県で発生面積が前年の1.4倍に拡大した。また、福岡、佐賀両県では平年発生面積の4～5倍の多発生になり、九州全域における発生面積率は15.7%で、昨年より1.5%上昇した。しかし、被害程度は平年並みであった。

麦：大分県の小麦にハモグリバエ類が多発生、佐賀県

の小麦にはアブラムシ類がやや多発生した。ハモグリバエ類は大分県の大麦でもやや多発生した。

### 2. 畑作物

ダイズ：高温少雨の気象条件下でハスモンヨトウの発生が平年よりやや早く、7月下旬～8月中旬から白変葉が認められたため、福岡、佐賀、長崎、熊本、宮崎各県で注意報が、また宮崎県では警報が発令された。福岡、佐賀両県で多発生、熊本、大分両県でやや多発生した。カメムシ類については、佐賀県で多発生、長崎県でやや多発生した。宮崎県では、カメムシ類とともにシロイチモジマダラメイガが多発生、マメコガネ、アオドウガネ等のコガネムシ類もやや多発生した。

サツマイモ：ハスモンヨトウが高温乾燥の気象条件下で、大分、鹿児島両県で多発生した。また、大分県ではヒメコガネ、ドウガネブイブイ等のコガネムシ類が、鹿児島県ではナカジロシタバとイモキバガがやや多発生した。沖縄県では少雨傾向のためイモゾウムシとアリモドキゾウムシがやや多発生した。鹿児島県の南薩地域でハイイロサビヒョウタンゾウムシが、サツマイモ害虫として初確認された。

ジャガイモ：秋季の高温乾燥のため、長崎県の秋作ジャガイモで食葉性ヤガ類が多発、ジャガイモガとアブラムシ類もやや多発生した。

### 3. 野菜

共通：近年、野菜・花き類では全国的に海外からの新しい侵入害虫が問題化しているが、九州地域においても、ミカンキイロアザミウマがイチゴ（福岡県）、バラ、イチゴ（佐賀県）、ガーベラ、カーネーション（宮崎県）で初めて確認された。本種の寄生範囲は広く、50科200種以上が記録されており、関東地域では、トマト、ナス、ピーマン、キク、シクラメンなどの野菜・花き類でも加害が確認されており、今後、九州においても多作物への被害拡大や分布の拡大が懸念される。また、本種は薬剤耐性が強く有効薬剤が少ないこと、各種作物における発生活態や被害解析が進んでいないこと、苗や鉢物による移動が容易なことから防除の困難性が指摘されている。

マメハモグリバエはすでに九州・沖縄地域の全県で分布が確認されているが、その後も各地域で、トマト、ナス、キク、ガーベラ等を中心に発生面積も広がっており、宮崎県と沖縄県では注意報が出された。

また、夏期～秋期は数十年来と言われる異常高温、少雨（乾燥）の気象が続き、ヨトウムシ類の多発が目立った。ハスモンヨトウは例年になく発生が早く、サトイモ、イチゴを初めとして各種の野菜・花き類で多発生し、8月～10月にかけて九州各県で注意報が発令された。シロイチモジヨトウの発生はここ2、3年小康状態であったが、夏秋期にエンドウ、ネギ、宿根カスミソウ類で多発生した（熊本県、大分県、鹿児島県）。

トマト、ナス、ピーマン：ミナミキイロアザミウマ、アブラムシ類、コナジラミ類、ハダニ類はいずれも冬春

期の栽培では平年並みか少発傾向であったが、夏秋期の栽培ではやや増加傾向にあり、タバココナジラミが大分、鹿児島両県のトマトで、ミナミキイロアザミウマが大分県のナス、ピーマンで多発した。また、オオタバコガが大分県のピーマンで多発した。

キュウリ、メロン、スイカ：ミナミキイロアザミウマ、アブラムシ類、コナジラミ類、ハダニ類のいずれも平年並～少発傾向であったが、夏秋期の栽培でミナミキイロアザミウマ、コナジラミ類がメロン（鹿児島県）とキュウリ（大分県）で多発した。

キャベツ、ハクサイ、ダイコン：冬春栽培ではコナガ、モンシロチョウ、アブラムシ類のいずれも並～少発傾向であったが、大分県と鹿児島県の秋冬栽培ではコナガの発生がやや多かった地域が見られた。また、熊本県の高冷地における夏期栽培ダイコンで、コナガが多発傾向であった。キスジノミハムシは、大分県の秋冬栽培でやや多発生の他は少発生であった。ハイマダラメイガは秋期の好天のため、大分県のハクサイと鹿児島県のダイコンで多発した。

イチゴ：ハダニ類は晩秋期から増加する地域が多く、11～12月に大分、宮崎、鹿児島各県で多発生となり、宮崎県では注意報が出された。ハスモンヨトウによる被害が各地で増加した。アブラムシ類は全般に少発傾向であったが、長崎、鹿児島両県では晩秋期に多発傾向となった。

その他の野菜：タバコガ類の発生が、キク、オクラ、スイカ、レタスなど各種作物で増加の傾向にある（長崎県、大分県、鹿児島県、沖縄県）。この害虫については、発生生態に不明な点が多く、有効な防除法が確立されていないことから、今後の発生動向に注意が必要である。

#### 4. 果 樹

共通：カメムシ類は越冬量が平年並～少であり、スギ、ヒノキの毬果が少なかったため、前期に局地的に被害を及ぼしたところもあり、福岡、鹿児島両県で注意報が発令されたが、後期の発生は少なかった。

カンキツ：ミカンハダニの発生は、マシン油散布や夏期の異常高温のため、春～夏期には少なかったが、秋に多くなり、長崎県で注意報が発令された。ピリダベン、フェンピロキシメート、テブフェンピラドに対する抵抗性ハダニが福岡、佐賀、長崎、熊本、鹿児島各県で発生しており、今後の分布拡大が懸念されている。ミカンサビダニは夏期の少雨により、黒点病の防除を行わなかった地域で多発した。ミカンハモグリガの発生はおおむね平年並みであったが、合成ピレスロイド剤抵抗性個体群が佐賀、長崎、熊本、鹿児島各県で分布を拡大し、福岡県でも一部の地域で感受性の低下が認められた。チャノキイロアザミウマが長崎県で、アブラムシ類が福岡県でやや多かった。沖縄県ではミナミトゲヘリカメムシを主体とするカメムシ類がやや多発した。佐賀県でワタミヒゲナガゾウムシが、鹿児島県の名瀬市と熊本郡でリュウキュウミカンサビダニが初確認された。

ナシ：ハダニ類が少雨のため、佐賀、大分、鹿児島各県で多発した。福岡県ではナシヒメシンクイが多発し、アブラムシ類もやや多かった。

カキ：福岡、佐賀両県ではカイガラムシ類がやや多かった。鹿児島県ではチャノキイロアザミウマがやや多かった。

モモ：熊本県でモモノゴマダラメイガが多発した。大分県でハダニ類が、モモハモグリガが鹿児島県でやや多かった。

ブドウ：フタテンヒメヨコバイが大分県の施設ブドウで多発した。福岡県ではコガネムシ類がやや多かった。チャノキイロアザミウマが大分、鹿児島両県でやや多かった。

クリ：大分県と熊本県の管理不良園ではクリタマバチの多発傾向が続いている。熊本県の北部ではネスジキノカワガが多発した。

熱帯果樹：沖縄県のマンゴーでマンゴーキジラミとマンゴーフサヤガの発生がやや多かった。

#### 5. 茶 樹

チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ、及びカンザワハダニが、暖冬に加え夏期の高温少雨乾燥の影響でやや多発生した県が多く、長崎、宮崎、鹿児島各県で注意報が発令された。また、鹿児島県では周辺作物で多発したハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウが、茶園に侵入し食害する特異な発生加害が見られた。

#### 6. 特用作物

サトウキビ：鹿児島県でメイチュウ類がやや多発生した他、特記すべき害虫の発生はなかった。

いぐさ：イグサシムシガが福岡県で多発、熊本県でやや多発した。越冬密度が平年と比べ2～3倍高かった熊本県では注意報が発令された。

(九州農業試験場地域基盤研究部)

(野菜・茶業試験場久留米支場)

(果樹試験場口之津支場)